

研究紀要青葉 Seiyō 第1巻第1号 2009年(平成21年12月21日)

研究論文

社会的認知と文脈における認知の視点からの 老年期における物語テキスト記憶に関する考察

REVIEW ON RECALL OF NARRATIVE TEXTS IN LATER LIFE FROM
THE PERSPECTIVES OF SOCIAL COGNITION AND COGNITION IN TEXT

細 川 彩

Aya Hosokawa

仙台青葉学院短期大学

社会的認知と文脈における認知の視点からの 老年期における物語テキスト記憶に関する考察

REVIEW ON RECALL OF NARRATIVE TEXTS IN LATER LIFE FROM
THE PERSPECTIVES OF SOCIAL COGNITION AND COGNITION IN TEXT

細川 彩

Aya Hosokawa

要 旨

老年期の認知処理過程におけるかつての研究では「衰退」を強調する結果が報告されることが多かったが、今日では、誕生から死までの各ライフステージにおける個々の能力の多面性、多方向性、多次元性に着目した生涯発達理論に基づき、加齢に伴う認知処理過程の変化における理論が確立され、その理論を支持する多数の研究結果が報告されている。それらの研究報告によれば、認知能力において「獲得」と「喪失」双方が生涯を通じて認められている。Hosokawa (2009)、Hosokawa and Hosokawa (2006)、細川ら (2008) による一連の成人の物語テキスト想起に関する研究によれば、若年者は表面的意味想起において高い成績を示す一方で、高齢者は物語テキスト処理過程において、深く、統合的な解釈的意味想起を表象することがそれぞれのライフステージにおける特徴として報告された。また、老年期には、実用的、社会的問題解決、形式的操作期後の発達、wisdom などの存在が示唆され、老年期における社会的認知による文脈を考慮した条件下では、テキスト命題想起遂行成績を最適化することが可能であった。これらの結果を踏まえて、老年期の物語テキスト認知処理過程について適応的認知および社会的認知による文脈から考察した。

Abstract

Many studies on cognitive process in later life used to emphasize the negative change, "Losses," from 1950's to 1980's. New views of aging mind, based on the life-span developmental theory which considered development as life-span process from birth to death, have supported possible models of "Gains" and "Losses" though life-span since 1990, however. Studies on recall of narrative texts in adulthood by Hosokawa (2009) and Hosokawa & Hosokawa (2006; 2008) clarified "Gains" in each life stage and found that recall performance reflected cognitive characteristics in each life stage could be explained with cognitive-goals: Older adults interpreted the text deeper and more synthesis than younger adults while younger adults recalled more propositions than older adults because storage of numerous amounts of information is important for youth while succession of knowledge accrued with abundant life experience to younger generation just match the social cognitive task in later life. Therefore, a later study manipulated social cognitive condition by Hosokawa & Hosokawa (2008) demonstrated that older adults were able to recall more propositions when they were asked to retell a child the story than those under the condition in which they were to retell an adult. The results from the sequent studies of recall of narrative texts in adulthood were discussed on the basis of review of literatures from the perspectives of social cognition and cognition in context.

キーワード: 老年期、想起、テキスト情報処理過程、社会的認知、文脈

Key words: later life, recall, text-information process, social cognition, context

受稿日: 2009年9月30日 受理日: 2009年10月26日

1. 成人期と加齢における社会的認知発達

一文脈における認知—

認知能力において「獲得」と「喪失」双方が生涯を通じて認められることから、加齢に伴う認知処理過程の変化における理論の確立や、実験研究において、かつては「衰退」を強調する結果が報告されることが多かったが、今日では、生涯発達における個々の能力の多面性、多方向性、多次元性に着目されている。成人の物語テキスト想起に関する研究によれば、若年者は表面的意味想起において高い成績を示す一方で、高齢者は物語テキスト処理過程において、深く、統合的な解釈的意味想起を表象することがそれぞれのライフステージにおける特徴として報告されている (Hosokawa & Hosokawa, 2006)。また、老年期においては、実際に、社会的関連が能力の向上として反映することが、実用的、社会的問題解決、形式的操作期後の発達、wisdom などの具体例として示唆されている。個人の目的達成、感情の向上を促進するため柔軟に、そして融通をきかせて社会的知識を操作するという観点からみれば、社会的認知の機能とは、人生の課題と目的、社会的現実性の表象、日常の社会的ジレンマに適應するための認知的戦略における個人の相互関係が重視されることと考えられる。物語テキスト研究においても、記憶再生の聞き手に子どもを設定した条件下では、命題を多く想起することが可能であった (細川・細川, 2008)。そのような適応的認知について社会的認知による文脈から老年期の認知処理過程について考察した。

2. 社会的認知とエイジング研究における主要な論点

パーソナリティと社会心理学の視点から、社会的認知が成人期の発達にどのように関連するかを考慮する必要がある。まず、第一に、社会的認知論において、伝統的に、社会的知識及びその認知処理過程について追及することと、自己と他者の心的表象に関して主に焦点が置かれていると考えられる。第二に、行動とその発達における社会

文化的帰属性の多側面性、多重層性について考慮することが指摘されている。つまり、原則的には、その時代と社会の特色による価値観、信念、出来事によって自己と他者と社会的状況の表象は非常に大きく影響されるということである。第三に、社会的認知とは、機能的視点から認知を実際に学習することである。つまり、実際の行動における自己表象の機能的な重要性について検討することとされている。問題とされていることに対して必ずしも情報処理メカニズムにおける規範的变化を重視する必要性よりむしろ、ある特定の条件が課されている下で、個人がどのように情報にアプローチし、それをを用いるか、ということなのである。こういったことから、実際の日常生活における社会的認知の重要性について考えてみたい。例えば、成人にとっての模範的認知課題が社会文化的知識と情報を伝達することであれば、自己の思考を表象するために言語を巧みに用いて、聞き手の理解を察し、そして自己の思考が必要に応じて再表象され、精緻化されるのである。こういった文脈で、解説的テキストあるいは物語を可能な限り再生する、という教示の下では質的差異が生じることが報告されている。従って物語想起遂行成績の結果は、社会的役割によって変化するものと考えられる。最後に、社会的認知と情動とは互いに力動的に作用し、心理的現実性を理解するための二者択一的モデルあるいは成人の知覚と行動に影響する新たな信念体制を構築している。例えば、現在のコーホートに属する高齢者は、どの程度、負の情動を抑制する傾向にあるのか、そして何が行動に衝撃を与えるか (例えば、コーピングストラテジーの選択など) ということが考えられる。

3. 社会的認知による文脈を考慮した高齢者の物語テキスト意味想起の最適化研究

多くの伝統的記憶実験では、単語リスト想起などを刺激として用いることが多く、「高齢者の記憶遂行成績の方が若年者よりも低い」という典型的結果を呈し (Smith, 1996; Smith & Earles, 1996)、加齢における情報処理過程の変化に付随

した記憶の規範的変化作業記憶や知覚処理速度における能力低下や加齢と情報処理過程の変化に伴う記憶の規範的変化に関する豊富な知見が報告されてきた。しかしながら、こうした実験室の条件下での短期記憶再生の類の伝統的記憶実験の結果が、高齢者が日常において実行する記憶機能をどれほど正確に説明しうるのかという疑問が次第に高まってきた (Hess & Pullen, 1996; West & Sinnott, 1992)。そこで、Hosokawa and Hosokawa (2006) は、単語リストの代わりに物語テキストなどの意味を持つ言語課題を記憶すべき刺激として用いることにより、高齢者群の能力を最大限に引き出すことを目的に、日常における記憶課題を実験室に持ち込むことを試みた。その結果、高齢者はテキストの命題と解釈的意味を保持することができた。

4. 理論的見解

4.1 社会的認知論と認知処理過程

伝統的に、社会的知識の表象とアプローチは根本的な認知処理過程に影響されると考えられてきた。つまり、人々が社会的情報をどのように処理するのかはその過程における時間と労力によって決定される。社会的情報処理におけるカテゴリー基準と帰属基準の区別がなされており、カテゴリー基準とは、個人の特徴をグループ属性の観点から判断するスキーマ的処理であるとされる一方で、帰属基準（または個性化）とは個人が人物や出来事の個々の客観的な特徴を熟考したり、それらが社会的表象から還元されたものとされる。それは、状況からの情報を自動的に事物の範疇に適応させる際の修正手続きとも考えられ、カテゴリー基準による処理よりも労力が必要とされている。この双方は、例えば、「夫が蒸発した。」あるいは、「16歳の女子高校生が妊娠した。」などという社会状況における現実的な問題を考える際、個人や自己の第一印象によって主に判断され、また、Baltes and Studinger (1993) による Wisdom の潜在的理論としての専門的知識により処理されることも考えられる。加えて、動機や目的が認知

処理的ストラテジーとして選択する可能性も示唆されている。

4.2 文脈主義的視点と社会的認知

個人の特定の状況から包括的な文化的側面に至るまで、多様なレベルで文脈に着目することは重要であり、文脈というものは社会的知識においてのみではなく、日常における認知的戦略を用いることにおいても重要な役割を果たすとされている。そして前述したとおり、動機によって認知的戦略が影響されるのである。例えば、物語テキストを用いた成人の記憶に関する研究においては、自らの記憶だけに頼り、子どもに物語を話すように教示を与えられると、成人の検査者に対して想起再生する条件下の群よりも命題想起の記憶遂行課題において高い成績を示した (細川, 2008)。加えて、高齢者は、詳細にかつ流暢に再生することが可能であることが報告されている。つまり、課題が文脈的に必要性が、個人の社会的情報処理に影響することを考慮する必要性が示唆されている。文脈の要素とは、1. 個人が状況に適應する社会的知識、2. 蓄積された経験を反映する特定の文脈における目的と必要性、3. 人生における状況の変化、4. 社会、歴史、文化の影響から成る。これらすべての要素が統合され、成人にとっての状況把握とそれに対応するための特定のストラテジーを操作する同期に影響を与えるものとされている。

4.3 聞き手による効果と物語想起

細川 (2008) による成人の物語テキストの意味想起研究において、社会的文脈を操作した条件下では、高齢者は高い課題遂行成績を示した。このことを踏まえて、物語の意味想起において聞き手が及ぼす効果について考察する。

記憶した物語の内容をもう一度話すという作業は、観た映画について話す、目撃した出来事を話すなどと同様に、行動や出来事を予め経験した言語表象による記憶から物語を生産あるいは再生する過程と定義できる (Dixon & Gould, 1996)。従って、記憶した物語を再生することは成人にとってきわめてありふれた日常の記憶行動と言える。

そして、たいていの場面において（日記や記録を記すことを除いて）、聞き手に対し口頭で再生することが多い。その際、再生内容の質は、個人の属性（年齢、言語能力、人生経験）や記憶された物語の内容（複雑性や構成）のみではなく、たとえば受身であってもその聞き手の存在に左右される（Bavelas, Coates, & Johnson, 2000; Clark, 1996; Dixon & Gould, 1996; Krauss, 1987）。実際、以前観た映画のパンフレットを想起する課題では、聞き手に口頭で再生する内容の方が筆記で再生する内容よりも詳細であり（Pasupathi, Stallworth, & Murdoch, 1998）、また、子どもがビデオの内容を再生する課題では、聞き手の親近性によってその内容の詳細さと視覚の鮮明さに違いが生じていることが報告されている（Takahashi & Sugioka, 1994）。Hyman (1994)の研究では、聞き手が検査者である場合と知人である場合には、想起した命題の数に違いは認められなかったものの、検査者にはテキストにきわめて忠実に、知人にはテキストの解釈と評価についてそれぞれ詳しく想起するという質的に違いが生じた。Pasupathi (1998)らのもう一つの研究では、熱心な聞き手と集中力が散漫な聞き手を用意した結果、熱心な聞き手に対してより詳しく再生したという結果が得られた。これらの報告から、聞き手の目的も話し手が要求されていることも、社会的文脈により多岐にわたり、聞き手が話し手の再生内容に影響を及ぼすことも、再生内容は詳細さ、完璧さ、精緻化、原文への忠実さなども要求によって異なることが明らかになっている。

4.4 社会的認知の文脈における操作による命題想起最適化

しかしながら、こうした社会的認知による文脈が操作されない条件下では、若年者を下回る命題想起成績を示し、従来の高齢者の記憶研究で報告されてきた典型的結果を支持した。命題想起成績において年齢群間に違いが認められなければ、その結果は、1) 刺激材料であるテキストが単純あるいは良く構成されていた、2) 加齢に付随する衰退や欠陥を代償する（例えば高い言語能力、特

定領域における専門的知識など）高齢者の特定の認知能力や人生経験によって説明されるであろう（Dixon & Gould, 1996; Hultsch, Hertzog, & Dixon, 1990）。テキスト記憶の研究により加齢の記憶システムがどのように課題に対応するかということが明らかにされつつあるものの、日常生活におけるエピソード記憶を再生することは難しい。日常生活における出来事は物語として構成され記憶されており（Schank, 1990; Schank & Abelson, 1995）、とりわけ物語形式のテキストには、普段我々が考えることや記憶していることが含まれていることが多い。さらに、こうした物語テキストを想起するという作業を考えると、社会的文脈において必要とされることが多々あり、それは特定の目的や要求によって多岐にわたっている（Blanchard-Fields, 1996）。そこで、日常生活における加齢の記憶システムと機能をより深く理解するために、細川ら（2008）による研究では、異なった社会的文脈からの要求にどのように適応させるかを明らかにすることを目的とし、子どもが聞き手である条件下で高齢者の記憶遂行成績を最適化させた。

5. 経験主義的視点

5.1 認知における自己の役割

自己とは他者が自分をどのように知覚しているか、あるいは生涯にわたって自分が置かれた社会的立場や役割によって形成されるものである。

a. 生涯発達の枠組み

Labouvie-Vief (1998)らは、情動的理解の形成という見地から、自己表象の発達の複雑さにおける成人の年齢群間の差異について研究している。幼少期の社会適応は、情動のシステムと認知的あるいは合理的システムに二分されている。そして、「情動的自己」とは、「より重要な合理的自己」より会に属するもの、とみなされているが、この二つの体制を統合させることが成熟における認知的達成であることとされている。年齢を重ねるにつれて、実生活や社会に適応させながら、自己受容を変容させていく。従って、個人の存在とは、

情動面そして認知面の双方の理解することにより成り立っていると考えられよう。しかしながら、個人の情動における現象学的経験、つまり、青年期から壮年期、晩年期にかけての情動的自己の経験のなかで現在の機能レベルを分析する必要性が示唆されている。

b. 社会心理学的枠組み

成人期における自己に関するスキーマ、自己に関する知識構造について考えると共に、自己における変容について着目したところ、Contor (1990) は個人の属する社会文化的状況を熟知するには、それぞれのライフステージにおいて新たな意味を持つ課題の力動的過程の考慮をすべきであると指摘している。他の研究者らは、この意味を未来の行動と現在の行動の解釈への指針として、なりうる、正のあるいは負の自己の概念としている。なりうる自己について、若年者と高齢者を比較していると、高齢者は、実際の経験と非常に密接に関連しているのに対し、若年者のなりうる自己の概念は、未来を想定したものや、より理想的なものが多く見られたと報告されている。年齢群間におけるなりうる自己の差異は、若年者は家庭環境と職業に、高齢者は身体的、個人的目的など、それぞれが重視する項目により影響されていた。加えて、高齢者は、大学生である若年者に比較して、自己を健康と関連させて考えていることも明らかになった。

また、自己表象と成人期の発達に関して、性別による役割に着目した研究によれば、年齢と個人内部の感受性には性の相関が認められたことを報告している (Blanchard-Fields, 1996)。若年者よりも高齢者の方が、自分自身について感受性が強いと感じていた。エイジングに伴う男性要素 (androgyny) についての研究では、若年者グループではより男性要素の強い女性、高齢者グループでは、より男性要素の強い男性について BSRI (the Bem Sex Role Inventory) を用いて調査しているが、個人内部の感受性では、発達に伴って「謙遜」する傾向に関連していること、おそらく、社会的役割の過渡期が影響しているのである

うとされた。以上のまとめとして、1. 年齢群間の自己の差異は、自己に関する知識構造 (例えば家庭を重視するのがあるいは健康か) の違いによるもの、2. 自己表象は、自己統制ストラテジー、記憶、意志決定コーピング、心理的適応に影響を与えていることが考えられる。

5.2 エイジングに対する態度

態度とは、社会的行動における決定に影響を与える心的要因である。生涯発達理論において、老年期の認知処理過程は、多様な要因によって影響されると定義されている (Baltes, 1985)。高齢者に比較して、若年者の方が高齢者とエイジングの過程をネガティブに評価している。しかし、Luszcz and Fitzgerald (1986) は、エイジングに対する適切な知識を得て、実際に高齢者との交流を深めれば、若年者も高齢者に対してよりポジティブな見方ができると述べている。高齢者が必ずしも、すべての面においてネガティブに評価されるわけではないということが多くの研究によって支持されている。例えば、運動における身体的スピードや記憶が衰退しても、一般知識や推測する能力は保持させるかあるいは向上することすらあることが報告されている。エイジング観に関する研究では、単純な個人のパーソナリティ特性に基づいた評定から実生活における具体例で高齢者をどのように評価するか、という理解へと移り変わっている。このことから、統制能力と評価の受け止め方の多面的、内容的モデルの重要性が示唆されている。「評価」が実生活の中におかれ、多面性についてのより多様な尺度を含んでいけば、より完璧な標的が明示されると考えられる。

5.3 文化と老年期の認知処理過程

老年期の認知処理過程に影響を与えると考えられる多様な因子の一つに文化がある。Levy & Langer (1994) による、高齢者の記憶に関するアメリカと中国における異文化間研究では、アメリカの高齢者の教育歴の方が中国の高齢者よりも高かったにも関わらず、記憶想起課題においては、中国の高齢者群の方がアメリカの高齢者群よりも課題遂行成績が高かった。また、同様に、それぞ

れの文化内で若年者との比較をしたところ、アメリカでは若年者の方が高い遂行成績を示したが、一方で中国人の年齢群間比較では、高齢者の課題遂行成績は若年者と同程度であった。この結果から、Levy & Langer (1994) は、高齢者を人生における「先達」あるいは「賢者」とみなす社会的態度が高齢者の遂行を最適化させたと結論付けた。

また、Hosokawa (2009) による、老年期の物語テキストの意味想起における日本とアメリカで行われた異文化間研究では、両文化群において、異なる文化が反映された物語テキストを刺激として呈示された条件下では、自身が属する文化が反映された物語テキストが刺激である条件下よりも、深く、統合的な解釈をしていることが報告された。それは、親しみのない課題に遭遇すると、瞬時にこれまでの豊富な人生経験から培った知識を総動員し、深く統合的に解釈することによって、記憶処理を促した結果と考えられる。つまり、自身の認知的ストラテジーを駆使する、いわゆる Wisdom が老年期の際立った特徴が存在するからに他ならない。

6. 日常的機能への示唆

社会的認知の処理過程は、日常における認知を明らかにするうえで重要な手がかりとなっている。社会的認知の研究は、生涯にわたる成人のそれぞれのステージにおける個人の内的関係をより応用的に理解するために潜在的に重要なのである。日常における認知活動の多くは、結果の原因を把握すること、結果を管理すべき統制能力として評価することと関連している。生活課題、自己に関するスキーマ、あるいは自伝的記憶であれ、社会的あるいは日常的機能と情動や動機の評価における個人的相違を関連付ける必要があるとされている。

細川ら (2008) の成人の物語テキスト記憶実験の結果によれば、学習や記憶文脈における要求の性質が老年期の社会的認知目的やタスクに合致したり関連したりすると、高齢者の命題想起成績は高くなることが報告された。これは、読んだ物語

を再生するという課題が、子どもが聞き手であるということが効果を持ち、社会的認知要求に対して感度が高いことや、いわば老年期における「語り」がこれまでの人生経験や知識を次世代へと「伝承」するための手段であることから社会的認知の文脈に適応していることから、その重要性が示唆された。子どもにお話をする、という課題は、成人に対して話すことより意味があり、テキストの記憶および想起により強い動機付けを駆り出し、より完璧な命題想起を促したためと考えられる。また、逆に成人に対して物語テキストの命題を再生する際、子どもが聞き手である条件下よりも成績が低かった理由としては、物語の想起課題の遂行成績が個人の記憶および認知能力と評価されるのではないかという懸念があり、課題に集中できなかった、ということが被験者からしばしば報告された (細川、2001)。あるいは、「高齢者は話がくどくどと長すぎる」というステレオタイプを持たれている可能性を案じ意図的に再生を短くしてしまうといった、いわゆる高齢者に対する偏見およびステレオタイプが、高齢者の認知課題遂行における潜在的能力を限定していることも考えられる (Levy, 1996; Levy & Langer, 1994; Steel, 1997; Steel & Aronson, 1995)。

7. 結論

以上より、社会的範囲内での認知について、基本的な情報処理技能を通して考察した。認知能力における年齢における変化に関する展望は、認知と環境の変化、社会的知識システム、ゴールと情動的反応とのそれぞれの相互関係を考えることによって広がりを見せている。複雑な認知機能の中には、基本的認知メカニズムだけではなく、知識の内容と構成と情動を抑制することによっても影響させているものもある。この領域の研究は進んでいるが、その限界についても考慮すべき点がある。それは、経験主義に基づく実証的研究が少ないことである。そして、社会的認知処理過程を研究することが難しいが、一方で、社会的過程を考慮した研究の必要性がある。従って、グルー

プロセスや力動的相互作用などの観点からの研究も示唆される。細川による、一連の、成人の物語テキスト記憶研究によれば、文化や社会的認知が老年期における認知処理過程に及ぼす影響の重要性が示唆されている。老年期の物語テキスト処理過程の特徴として、記憶を保持するための認知的戦略としてテキストを深く、統合的に解釈をしているが、それは、貯蔵、連結されている、これまでの豊富な自生経験で培った知識に効果的に活用するからである(Mergler & Goldstin, 1983; Meyer, 1986; Perlmutter, 1988)。高齢者の解釈的意味想起が深さや統合性といった基準で評価が高かったが、その内容は、単にテキストの命題が持つ表面的意味そのものを解釈するというよりむしろ、自身が長い人生における様々な経験から得た教訓や道徳を想起することが多かった。高齢者の解釈的意味想起は、到達したパーソナリティーの完成が反映した結果ではなかろうか。

Bauer & McAdams (2004) らによる、成人の人生についての「語り」に関連したパーソナリティーの発達に関する研究では、人生における変化(実際に肯定的なものよりも否定的なものの方が多いにも関わらず)を「成長」として解釈する個人は、その変化を肯定的に受け止めるのみでなく、パーソナリティーの発達と捉えることが報告され、社会的認知は「成熟」と、社会的情動は「幸福」とそれぞれ相関があるとしている。物語テキストの解釈的意味想起における「語り」と自身の人生を「語る」ことには、共通して、パーソナリティーの完成への到達にいたるまでの認知、情動、思考が表象されていることの示唆がある。こうしたことを踏まえて、文化および社会的認知による視点から、不条理で曖昧に満ちた人生における「幸福」や「後悔」などの肯定的および否定的、かつ複雑な情動、認知、思考に焦点を当て、生涯にわたるパーソナリティーの発達を計量心理学的に検討することが、今後の課題として考えられる。

最後に、情動理解における発達の変化が結果として社会的状況、問題、あるいは戦略の優先につ

いての解釈における違いとなって現れる、ということについて研究することも必要である。つまり、影響因子の密度および評価、社会的知識の基礎、情動的統制における成人期の変化に関して実証されてきたことが情動的な文脈における日常的認知に関する将来の研究の重要性を示唆している。

文 献

- Baltes, P. B. & Staudinger, U. M. (1993). The search for a psychology of wisdom. *Current Directions in Psychological Science*, 2, 75-80.
- Bauer, J. J. & McAdams, D. P. (2004). *Personal growth in adults' stories of life transitions*. *Journal of Personality*, 72, 573-602.
- Bavelas, J. B., Coates, L., & Johnson, T. (2000). Listeners as co-narrators. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 941-952.
- Blanchard-Fields, F. (1996). Social cognitive development in adulthood and aging. In F. Blanchard-Fields & T.M. Hess (Eds.), *Perspectives on cognitive change in adulthood and aging* (pp. 454-487). New York: McGraw-Hill.
- Clark, H.H. (1996). *Using language*. Melbourne, Australia: Cambridge University Press.
- Contor, N. (1990). From thought to behavior: "Having" and "doing" in the study of personality and cognition. *American Psychologist*, 45, 735-750.
- Dixon, R.A., & Gould, O.N. (1996). Adults telling and retelling stories collaboratively. In P.B. Baltes & U.M. Staudinger (Eds.), *Interactive minds: Life-span perspectives on the social foundation of cognition* (pp. 221-241). Cambridge, MA: Cambridge University Press.
- Hess, T.M., & Pullen, S.M. (1996). Memory in context. In F. Blanchard-Fields & T.M. Hess (Eds.), *Perspectives on cognitive change in adulthood and aging* (pp. 387-427). New York: McGraw-Hill.
- Hosokawa, A. (2009, August). *The recall of the interpretive meanings of narrative texts in later life from the cross-cultural perspective*. Paper presented at International Conference on Asia Pacific Psychology, Seoul, South Korea.
- Hosokawa, A. & Hosokawa, T. (2006). Cross-cultural study on adult age group differences in the recall of the literal and interpretive meanings of narrative text. *Japanese Psychological Research*, 48, 77-90.
- 細川 彩 (2001) 異文化間の物語テキストの表面的意味想起と解釈的意味想起における年齢群間比較—Aging

- mind* の新たな視点による *wisdom* の研究—東北大学大学院教育学研究科 修士論文 (未公開) .
- 細川 彩・細川 徹 (2008). 社会的認知による文脈とライフスタイル条件による高齢者の物語テキストの表面的意味想起の最適化研究. *東北大学大学院教育学研究科研究年報*, 第56集・第2号, 219-228.
- Hultsch, D.F., & Dixon, R.A. (1983). The role of pre-experimental knowledge in text processing in adulthood. *Experimental Aging Research*, 9, 17-22.
- Hultsch, D.F., Hertzog, C., & Dixon, R.A. (1990). Ability correlates of memory performance in adulthood and aging. *Psychology and Aging*, 5, 356-368.
- Hyman, I. E. (1994). Conversational remembering: Story recall with a peer versus for an experimenter. *Applied Cognitive Psychology*, 8, 49-66.
- Krauss, R. M. (1987). The role of the listener: Addressee influences on message formulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 6, 81-98.
- Levy, B. (1996). Improving memory in old age through self-stereotyping. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 1092-1107.
- Levy, B., & Langer, E. (1994). Aging free from negative stereotypes: Successful memory in China among the American deaf. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 989-997.
- Luszcz, M. A., & Fitzgerald, K. M. (1986). Understanding cohort differences in cross-generational, self, and peer perceptions. *Journal of Gerontology*, 41, 234-240.
- Mergler, N., & Goldstein, M. D. (1983). Why are there old people? Senescence as biological and cultural preparedness for the transmission of information. *Human Development*, 26, 72-90.
- Pasupathi, M., Stallworth, L.M., & Murdoch, K. (1998). How what we tell becomes what we know: Listener effects on speakers' long-term memory for events. *Discourse Processes*, 26, 1-25.
- Perlmutter, M. (1988). Cognitive potential life. In J. E. Birren & V. L. Bengtson (Eds.), *Emergent theories of aging*, 247-268. New York: Springer.
- Schank, R.C. (1990). *Tell me a story: A new look at real and artificial memory*. New York: Charles Scribner's Sons.
- Schank, R.C., & Abelson, R.P. (1995). Knowledge and memory: The real story. In R.W. Wyer (Ed.), *Knowledge and memory: The real story. Advances in social cognition series* (Vol. 8, pp. 1-85). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Shah, I. (1967). *Tales of the dervishes*. London: Jonathan Cape.
- Smith, A.D. (1996). Memory. In J.E. Birren & K.W. Schaie (Eds.), *Handbook of the psychology of aging* (4th ed., pp. 236-250). San Diego, CA: Academic Press.
- Smith, A.D., & Earles, J.L. (1996). Memory changes in normal aging. In F. Blanchard-Fields & T.M. Hess (Eds.), *Perspectives on cognitive change in adulthood and aging* (pp. 192-220). New York: McGraw-Hill.
- Steele, C.M. (1997). A threat in the air: How stereotypes shape intellectual identity and performance. *American Psychologist*, 52, 613-629.
- Steele, C.M., & Aronson, J. (1995). Stereotype threat and the intellectual test performance of African Americans. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 797-811.
- Takahashi, N., & Sugioka, T. (1994). *Young children's remembrance of an animated story: The difference in reproduction to different listeners*. Poster session presented at ISSBD, Amsterdam, Netherlands.
- West, R.L., & Sinnott, J.D. (Eds.). (1992). *Everyday memory and aging: Current research and methodology*. New York: Springer-Verlag.